

水彩畫用紙の談

石川一郎

水彩畫の用紙としては、ワットマン紙を始め、OW紙、水彩紙など種々ある、又た木炭紙や普通の畫學紙でも、色が白く質が硬く、目が粗らければ、水彩畫に使用されぬことはない、現に木炭紙は、水彩畫に用ひて、中々面白いものが出来る、何れの紙にも、皆其紙特有の性質があるから、此呼吸を呑込まぬと、初めは一寸工合の悪いものである。

ワットマン紙とOW紙とは、略ぼ似たものである、ワットマン紙の方が、質が稍柔かなやうで、OW紙の方は、稍や硬い氣味である、何れにも荒目と細目との二種がある、之は“Not”と“Hot Pressed”との二種で、此他に“Rough”と云ふ極荒いのがあるが、之はまだ輸入されて居らぬやうである、大きさにも種々あるのだが、輸入されて居る分は種類が、限られて居る。

荒目が好いか、細目がよいかと云ふことは、人々の好みであるから、一概に決める譯には行かない、荒目の長所は、下塗りの色が、荒目の底に溜まつて居る上に、上塗の色を、手早くかければ、凸面の處だけに、色が着くから一種面白い趣が出ることもあるが、之は、面の凹凸が、自から光と空氣の感じを現はすに、助けとなることもある、その代はり、時にはハジキ過ぎて、塗るに手間のかゝることもあるが、之は後に談すやうな方法で、防ぐことも出来る、私自身は細目よりも、荒目の方が好きである、細目の長所は、細かい仕事をするには工合が宜いが、其代はり色を塗る時に、只だスルくして、濃く着けることが困難である、筆と一處に色がとれて来るやうなことにもなれば、無用なシミが、方々に出来るやうな事にもなる、併し之も馴れると、呼吸が分つて来て、面白いものが出来るやうにならう、細目を水張りにする時に、紙が充分柔らかになつて居る中に、上へ目の荒い麻布(地をして無いカンバス)の類を被せ、上から静に敲けば紙の面へ、麻の目が付いて、一寸工合のよ



水彩画用紙の談

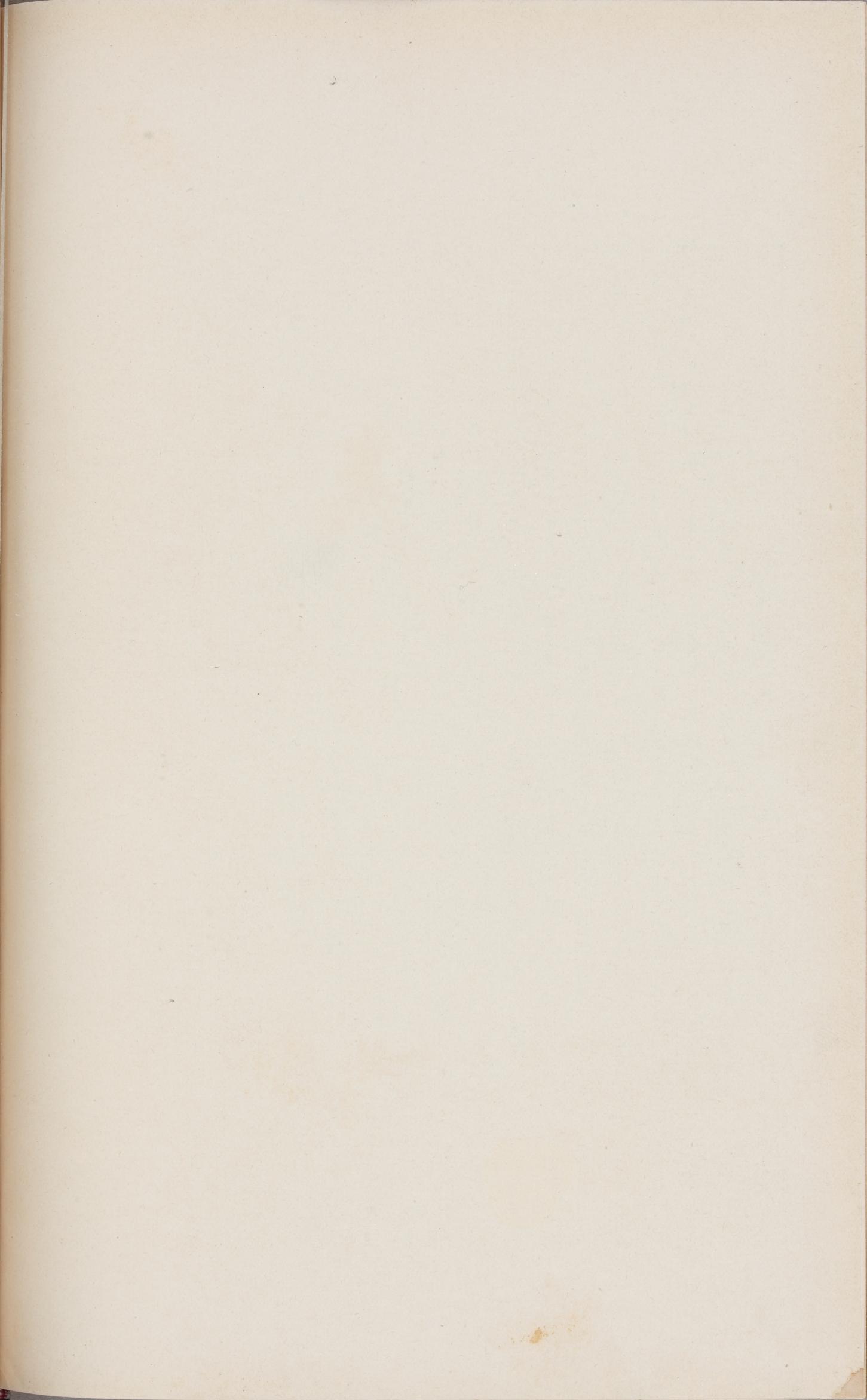
石川 鈴一郎

水彩画の用紙としては、ワットマン紙を始め、OW紙、水彩紙など種々ある、又た本炭紙や普通の画學紙でも、色が白く質が硬く、目が粗らければ、水彩画に使用されぬことはない、現に木炭紙は、水彩画に用ひて、中々面白いものが出来る、何れの紙にも、皆其紙特有の性質があるから、此呼吸を呑込まぬと、初めは一寸工合の悪いものである。

ワットマン紙とOW紙とは、略似たものである、ワットマン紙の方が、質が稍柔かなやうで、OW紙の方は、稍や硬い氣味である、何れにも荒目と細目との二種がある、之は、"Not" と "Hot Pressed" との二種で、此他に "Rough" と云ふ極荒いのがあるが、之はまだ輸入されて居らぬやうである、大きにも種々あるのだが、輸入されて居る分は種類が限られて居る。

荒目が好いか、細目がよいかと云ふことは、人々の好みであるから、一概に決める譯には行かない、荒目の長所は、下塗りの色が、荒目の底に溜まつて居る上に、上塗の色を、手早くかければ、凸面の處だけに、色が着くから一種面白い趣が出ることもあれば、面の凹凸が、自から光と空氣の感じを現はすに、助けとなることもある、その代はり、時にはハジキ過ぎて、塗るに手間のかることもあるが、之は後に譲すやうな方法で、防ぐことも出来る、私自身は、細目よりも、荒目の方が好きである、細目の長所は、細かい仕事をするには工合が宜いが、其代はり色を塗る時に、只だスルくして、濃く着けることが困難である、筆と一處に色がとれて来るやうなことにもなれば、無用なシミが、方々に出来るやうな事にもなる、併し之も馴れると、呼吸が分つて来て、面白いものが出来るやうにならう、細目を水張りにする時に、紙が充分柔らかになつて居る中に、上へ目の荒い麻布(地をして無いカンバス)の類を被せ、上から静に敲けば紙の面へ、麻の目が付いて、一寸工合のよ





いものが出来るのである。

水彩画紙と稱する一種の紙があるが、之は私は大嫌いである、ワットマン紙やOW紙は、リンネルで製してあるが、之はリンネル製ではないやうである、多少藁が入つて居るかも知れぬ、兎に角、色を塗つて乾いてから、色が前とは違つて見へる、之は紙が吸込む爲めかも知れないが、余程加減が六かしい、馴れたらば宜いだらうが私は未だそれ程の経験を持たぬ。

ワットマン紙も、OW紙も、風を引く、OW紙は引かぬと云ふ人もあるが、矢張り引くのである、風を引く理由は、濕氣の爲めに、ドーサが黴るのである、之を防ぐのは、丁度煎餅や海苔のシメるのを防ぐと同じ方法でよい、ブリキの筒に入れて置いて置いてもよければ、桐の密閉のできる箱に入れて置いても宜からう、私は通常寫眞のブロマイドの筒へ仕舞つて置くが、それでも永くなると、黴ることもある、黴たのでも、製造所へ持つて行けば、只で換へてくれるそうであるが、日本ではそんな譯には行かない、併し此頃私の経験では、黴は一向差支ないやうである、私は水貼りの時に熱湯を用ゐる、即ち湯貼りにする、風呂桶の沸いてゐる中へ、ドブリと漬ければ、ニカワは水よりも湯に、早く柔らかになるから、直ぐに紙が充分に延びて、仕舞ふ、一分か二分で充分である、其れ以上永く漬ければ、最早紙が溶けてしまふから、注意を要する、ワットマン紙も、OW紙も、新らしいものは殊にニカワが強いから、色を彈ぢく氣味があるが、湯に漬ければ、ニカワが多少溶解して、抜けてしまうので、丁度よくなる、又此時に風を引いたシミが、紙面へ一杯に出ても構はぬから、其儘兩面から綺麗に水分を拭ひ、毎もの順序で、貼つて仕舞ふのである、之が乾いてから、色を塗つても少しもシミが出ない、今まで數十回、私は此経験を持つて居るから、大抵は安全であらうと思ふので、茲にお談をする次第であるが併萬一無効の場合があらうとも、怒られては困るから、豫めお断り申して置く、なぜ此方法でシミが消へるかと云へば、湯の爲めに、ドーサが全體に融和して、風を引いて居る部分へも、他部分のドーサが、普及するからである、と、之も私の想像説であるから、信用は出来ぬかも知れぬ。